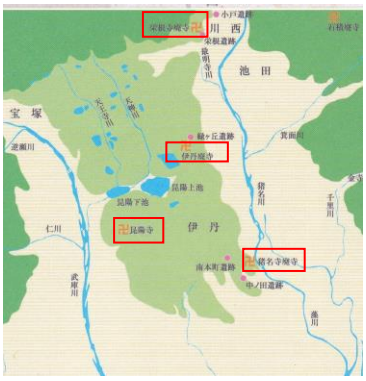
播磨の古代寺院と造寺・知識集団 45

西摂の古代寺院 2 ― 伊丹廃寺 ―

寺 岡 洋



伊丹台地

猪名寺廃寺に続き、今回も自転車で行ける近所の古代寺院です。

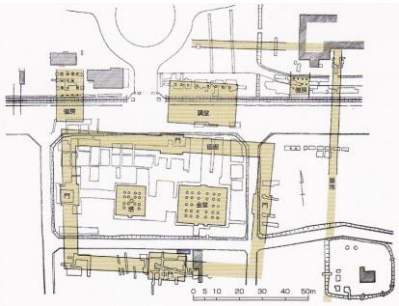
伊丹廃寺は、猪名寺廃寺のおおよそ4km弱北に位置する（右図）。西宮から国道171号線を東進し武庫川を渡ると左手（北側）に朱塗りの山門が見える。行基（ぎょうき）ゆかりの**昆陽寺**（こやでら）で、さらに進むと右手に伊丹市役所、東隣に伊丹市立博物館がありぜひ寄りたい。市立博物館は県立博物館もない時代に伊丹廃寺の発掘を契機に建てられたそうである。

市役所の北方には渡り鳥の飛来地としても知られる昆陽池公園が広がる。昆陽池は、行基・知識集団により、731（天平3）年に造成された「**昆陽上池**」と推定され、あわせて「**昆陽施院**（池院）」も作られている。西方にはさらに広大な「**昆陽下池**」もかつて存在した。

昆陽池は今も広いが、地図で見ると戦後に半分弱埋立られている。これらの池は河内の**狭山池**（さやまいけ）にみられるように、行基の時代の後、拡張されている。

昆陽池の東には広い瑞ヶ池（ずがいけ）があり、その東が国史跡・伊丹廃寺。史跡公園に整備され、金堂・塔基壇が復元されている。向かい（北側）は陸上自衛隊伊丹駐屯地で、伊丹廃寺の寺域と重なる。周辺には伊丹廃寺と並行する時期の集落も存在する（緑ヶ丘遺跡）。

伊丹段丘は東を猪名川、西を武庫川に区切られ、台地中央部を昆陽池陥没帯が斜行する。その窪地に昆陽池・瑞ヶ池など多くの池が造られ、古代山陽道、西国街道が通過した。博物館・市役所敷地もかつては池だった。伊丹廃寺は台地の東縁に、猪名寺廃寺は台地東縁の末端部に立地する。



伊丹廃寺の調査

伊丹廃寺の調査は1958年の冬休み、金堂跡から始まり、1966年の金堂跡西辺の瓦窯跡調査まで、9年にわたり続けられた。当時の学術調査の主力は学生だった。調査を指導した高井悌三郎氏を始め、京大生、高校生の文字通り手自弁持参で行われ、地域の意のある人が応援している。発掘事務所は近所の方が自宅を提供し、調査地の地主さん、自衛隊も敷地内調査を援助した。さながら、発掘調査のための「知識」集団とでもいう趣である。

「西側掘立遺構」の調査では、高井先生と学生の二人で掘った由。善正寺廃寺（羽曳野市）の調査を藤澤一夫氏が一人でされたことを思い起こされる。報告書などを読むと、「伊丹廃寺 発掘物語」という感がある。

伽藍配置

金堂北面 瓦積基壇と階段

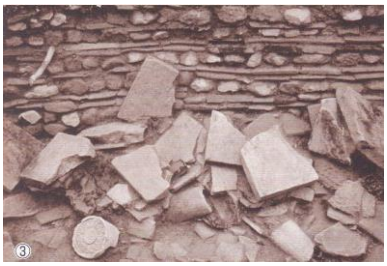
東に金堂、西に塔、回廊の北に講堂を配し、猪名寺廃寺と同じく法隆寺式伽藍配置だが、なぜか講堂が東に偏っている。

門址、僧堂と推定される掘立柱建物が2ヶ所、寺域を囲む築地の一部などが確認された。

築地は東西138m、南北推定130m弱。回廊は東西約84m、南北52m内外と広い寺域をもつ。講堂が中軸線から東による例は、伯耆の斎尾（さいのお）廃寺（特別史跡 鳥取県琴浦町）にみられる。斎尾廃寺では東播磨ブランドの蓮華文帯鴟尾（しび）が出土している。

僧坊を2ヶ所も備えていたとすれば、常住する僧もそれなりにいたことが推測され、西摂における主要な寺院であったと考えられる。『出雲国風土記』、『日本霊異記』などを読むと、僧のいない寺もあり、いても少ない。

金 堂 跡


金堂跡北面の塼の崩落

藪になっており、一画を伐採して畑にされていた方が畑を耕しているとき、大きな水煙（すいえん）の残欠（高さ115cm）を収集された。さらに、竹の根切りのため深く掘ったところ瓦が並んでいた。東アジアで唯一といわれる伊丹廃寺様式（?）の瓦積基壇の出現である。

基壇の規模は、東西約20m、南北約16m。階段が南面に2ヶ所、北面に1ヶ所ある。基壇の高さは0.80m内外。基壇に礎石は残っておらず、礎石の抜き取り跡のみ。金堂南面に階段を2基並置する例は稀有で、若狭国分寺（小浜市）に類例がある。若狭国分寺は破格というか、塔の南西に古墳が残されており、本尊は古墳と向き合う？ 瓦葺ではなかったようだし。

塔 跡

基壇の規模は方12.70m。基壇は、「そのくずれが大きく、現高0.20m前後が最高」だった。塔心礎は失われていた。基壇西面 →

塔基壇の版築（はんちく）技法　―敷葉工法―

金堂や塔など重い建築物を支える版築の状況について、塔基壇の断面調査をされた橋本久氏の文を引用します〔伊丹市立博物館２０１３〕。ちなみに、薬師寺西塔の総重量は４８３トンにもなる。相輪は３トン〔小川２０１０〕。

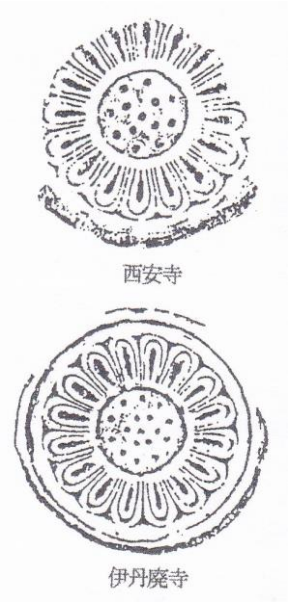
「渾身の力を込めて、わずかに叩き割れた粘土剥片の間から、まだ鮮やかに緑色を保った葉を検出し、非常に優れた版築技術に驚嘆させられていた。……粘質土を叩き締めては樹木の葉を敷いてさらに粘質土を置き、叩き締めるという作業を繰り返したようである」。

この基壇の造り方は「敷葉工法」とも呼ばれるもので、**狭山池**の堤や大宰府の**水城**（みずき）でもみられる。もし、昆陽池（『行基年譜』の昆陽上池推定地）を発掘し、敷葉工法が確認されれば行基の関与が明白になるが。

遺　物 ― 瓦 ―

発掘調査で一番たくさん出土するのは瓦であり、軒丸瓦の文様などから他の寺院とのつながり（ネットワーク）や、寺の創建年代が推測される。

伊丹廃寺で出土している古代の瓦は、軒丸瓦３種、軒平瓦５種、丸・平瓦、それに道具瓦とよばれる熨斗瓦、面戸瓦などがある。　軒丸瓦Ⅰ →



創建時に使用された**軒丸瓦Ⅰ**は、細弁１６弁蓮華文（菊花様単弁花文）で、「大和西安寺・小山廃寺・檜隈寺などに源流があり」、「伊丹廃寺例にもっとも近い例は、……大和西安寺・片岡王寺（王寺町）・尼寺廃寺（香芝市）に類例がある」〔大脇２０１５〕。

伊丹廃寺の建立を主導した氏族・氏族集団と大和の北葛城地域の関りについては、**威奈（猪名）真人**が猪名川流域から北葛城に本拠を移しており、ネットワークが存在したであろう。西安寺は百済系の**大原史**（ふひと）、檜隈寺（ひのくまでら）は**東漢**（やまとのあや）氏が主導した寺とされる。檜隈寺の講堂基壇は瓦積基壇である。

遺　物 ― 瓦以外 ―

・相輪（そうりん）を構成する銅製品など

水煙（すいえん）・九輪（くりん）・風鐸（ふうたく）

九輪の部材である覆輪（ふくりん）の内側には鍍金跡が残り、相輪全体が金色に輝いていたであろう。本来、塔は相輪部がメインで、相輪を支える心柱（しんばしら）が建物とは関係なく独立して立ち、建物は付録になる。

・塼仏（せんぶつ）　型を使用し作られた仏像

如来と菩薩をかたどったものが４点出土し、２点は表面に金箔が残る。金箔を張り付けた壁体の断片も出土しており、金堂内部は黄金色であった可能性が高い。

・日常容器からみる伊丹廃寺

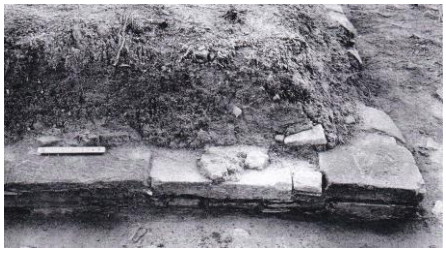
白鳳時代から奈良時代前期が伊丹廃寺の最盛期で、以後、平安時代にかけて次第に衰微していった。

瓦積基壇

伊丹廃寺は金堂・塔基壇の化粧が瓦積で、かつその瓦積のやり方が異なる。

基壇は風雨による崩壊を防ぐためや装飾のため、主として石で化粧をする。瓦や塼を使う場合もあり、渡来系とみなされている寺院に比較的多いようであるが、石より作業が簡単なせいか時代が下ると国分寺や官寺でも類例が増える。

上図は金堂基壇で、地面に接する最下段には地覆（じふく）石と呼ばれる石の代わりに塼を敷き、その上に玉石と半裁した平瓦を交互に積んでいる。最上段には葛石（かつらいし）の代わりにやはり塼を置く（前頁に葛石の塼が落下した図版）。



塔跡　北西隅基壇積

塔の基壇は、やはり最下段には塼を敷き、その上に半裁した平瓦を重ねる。葛石はなかったようだ。図版では瓦積が崩れてなくなっている。

伊丹廃寺の金堂瓦積基壇は、日本、古代朝鮮にも類例がなく、独自のアイデアである。塼も使用しており、このような斬新な基壇を採用した人物・集団は少なくとも旧守的な発想をもたなかったのであろう。基壇に塼を使う例は、**芦屋漢人**（あやひと）が主導したとされる芦屋廃寺（芦屋市）で類例がある。百済系・**田辺史**が主導したとされる田辺廃寺（柏原市）の東塔は塼積基壇である。

創建氏族・造寺集団 ―人名録―

古代寺院を創建した人物・氏族集団については、飛鳥寺や山田寺のように、まれに明らかになる場合があるが、現法隆寺（西院伽藍）や四天王寺でも推測の域である。

河辺郡（猪名川流域）で文献に名を残す氏族名のリスト（すべてではない）を引用する〔尼崎市２００７〕。

表　河辺郡のおもな氏族

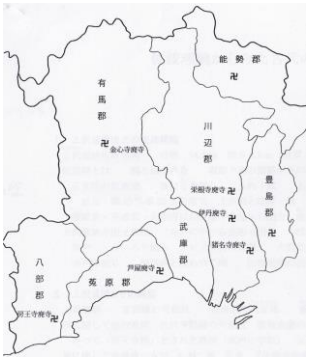
氏族名	おもな史料	備考
為奈真人	記・紀・日本三代実録	宣化天皇の子孫
川原公	記・紀・日本三代実録	為奈真人の同族
椎田君	記・紀	為奈真人の同族
凡河内直	猪名所地図	河辺郡司
高橋朝臣	日本三代実録	もとは膳臣
秦	東大寺三綱牒	
物部	長岡京木簡	
若湯坐連	日本三代実録	物部氏の同族
楊津造	続日本紀	それぞれ河辺郡内の地名（楊津郷・久々知・為奈・坂合郷）により居住を推定
楊津連	続日本紀	
久々智	新撰姓氏録	
為奈部首	新撰姓氏録	
坂合部	新撰姓氏録	

■引用・参考文献

『摂津伊丹廃寺跡』　伊丹市教育委員会　１９６６年
『伊丹廃寺跡―金堂跡に築かれた瓦窯跡資料を中心として―』
伊丹市立博物館　２０１３年
解説資料『伊丹廃寺』伊丹市立博物館　１９８４年
図録『発掘された寺院　～西摂を中心に～』
伊丹市立博物館　２００１年
図録『昆陽池・昆陽井』伊丹市立博物館　２００３年
図録『古代の猪名野　伊丹台地に刻まれた開発の歴史』
伊丹市立博物館　２００９年
パンフレット「伊丹廃寺跡」伊丹市立博物館
『伊丹市史』第１巻　伊丹市　１９７１年
『図説　尼崎の歴史　上巻』尼崎市　２００７年
『国府・国分寺の謎を探る』但馬国府・国分寺館　２００６年
＊＊＊
橋本久ほか　１９８４「伊丹廃寺跡の調査」
『地域研究　いたみ』１４号
高井悌三郎　１９７１「伊丹廃寺跡」『伊丹市史』第１巻
高井悌三郎　１９８５「摂津伊丹廃寺跡　その後の調査」
『地域研究　いたみ』１５号
藤本史子　２００９「伊丹廃寺跡出土資料の再検討（一）」
『地域研究　いたみ』３８号
藤本史子　２０１２「河辺郡の古代寺院について
―伊丹廃寺と猪名寺廃寺を中心として―」
『菟原Ⅱ　森岡秀人さん還暦記念論文集』菟原刊行会
西本昌弘　２００７「行基設置の楊津院と河尻」
『地域史研究』１０４　尼崎市立地域研究史料館
小川三夫　２０１０『宮大工と歩く奈良の古寺』文藝春秋
大脇　潔　２０１５「瓦からみた西摂の古代寺院」
『地域研究　いたみ』４４号
寺岡　洋　２０１２『ひょうごの古代朝鮮文化
―猪名川流域から明石川流域―』

摂津西部の古代寺院

八部郡　房王寺廃寺
菟原郡　芦屋廃寺
武庫郡　なし
河辺郡　猪名寺廃寺
伊丹廃寺
能勢郡　大里廃寺
有馬郡　金心寺廃寺
豊島郡　金寺山廃寺



威奈真人（いなのまひと）
天武１３年（６８４）　八色の姓制定に際し真人を賜姓
威奈大村（６６２～７０７）　蔵骨器銘文
「大倭国葛木下郡山君里狛井山崗」（香芝市穴虫付近）
＊越後で病死し、大和葛木の地に帰葬された
本宗家は大和に移ったが同族が河辺郡に居住する

川原公（かわはらのきみ）
『新撰姓氏録（しょうじろく）』摂津国皇別
「威奈真人同祖、……居によって川原公の姓を賜う」
『三代実録（さんだいじつろく）』
貞観５年（８６３）　威奈真人菅雄、川原公清水
課徭（庸調と雑徭）の免除
元慶４年（８８０）　河辺郡住人　従七位下川原公福貞
有馬郡住人　無位川原公干被
＊従七位下は郡司（郡領）のランク
＊有馬郡にも居住する在地の有力豪族

凡河内直（おうしこうちのあたひ）
凡河内直　　河辺郡擬少領（郡司の二等官）
凡河内直指人　河辺郡主帳（郡司の四等官）
「摂津職（せっつしき）河辺郡猪名所地図」
＊天平勝宝８年（７５６）　平安時代後半頃の写し？
凡河内直阿曇麻呂　川辺郡郡家郷戸主
「東大寺三綱（さんごう）牒」天平勝宝８年（７５６）
＊東大寺から解放された奴婢を受け入れる
凡河内忌寸（いみき）石麻呂
『続日本紀（しょくにほんぎ）』慶雲３年（７０６）
「摂津国造従七位上　凡河内忌寸石麻呂」
＊国造（くにのみやつこ）は在地の有力豪族から選ばれた
姓（かばね）の忌寸は直より上位。真人が最高位。

秦　「東大寺奴婢見来記」天平勝宝３年（７５１）
秦美止保利　秦乙万呂の属する戸の戸主
秦乙万呂の息子（名前不詳）　河辺郡坂合郷
＊東大寺に奴２名を寄進
＊名前も記載されない人物が奴婢を寄進している
秦氏は富強な氏族集団であったと推測できる
＊「但馬国正税帳　天平９年（７３７）」にみられる
「買奴料」は奴一人に稲１０００束。奈良時代の
稲１束は現在の米２合。馬　２５０～３００束／頭
＊豊島郡に秦上郷・秦下郷、有馬郡には幡多郷がある

坂合部連（さかあいべのむらじ）
「伊丹市史」では、渡来系と推定する
「坂上（さかのうえ）系図」にある「姓氏録逸文」
七姓の漢人のうちの「皂郭（そうかく）」の子孫

楊津連（やないつのむらじ）・**楊津造**（みやつこ）
天平宝字五年（７６１）に賜姓
王国嶋等５人に楊津連、王宝受等４人に楊津造
唐の熊津都督・王文度を祖とする中国系氏族
＊王文度は６６０年、新羅武烈王（在位６５４～６６１
年）を三年山城（報恩）で接見中急死〔三国史記〕
＊楊津は猪名川と神崎川の合流地点周辺の津（泊）

日下部宿禰浄方（くさかべのすくねきよかた）
『続日本紀』天平神護２年（７６６）
「摂津国武庫郡大領従六位上　日下部宿禰浄方
献銭百万椙榑一千枚　授外従五位下」
＊武庫郡大領　銭貨・材木を献納した富強の人

神人為奈麻呂（みわひとのいなまろ）
『続日本紀』延暦４年（７８５）
叙位　摂津国能勢郡大領外正六位上→外従五位下
＊能勢郡は和銅６年（７１３）、河辺郡から分割・成立
＊同時に４人の大領が叙位されているが、神人のみ姓
をもっておらず、新興豪族であろうか